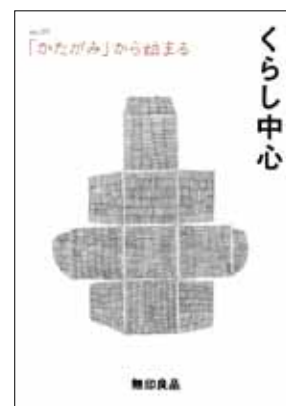
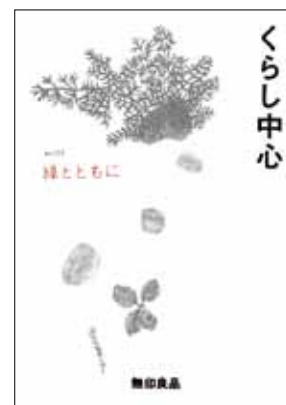
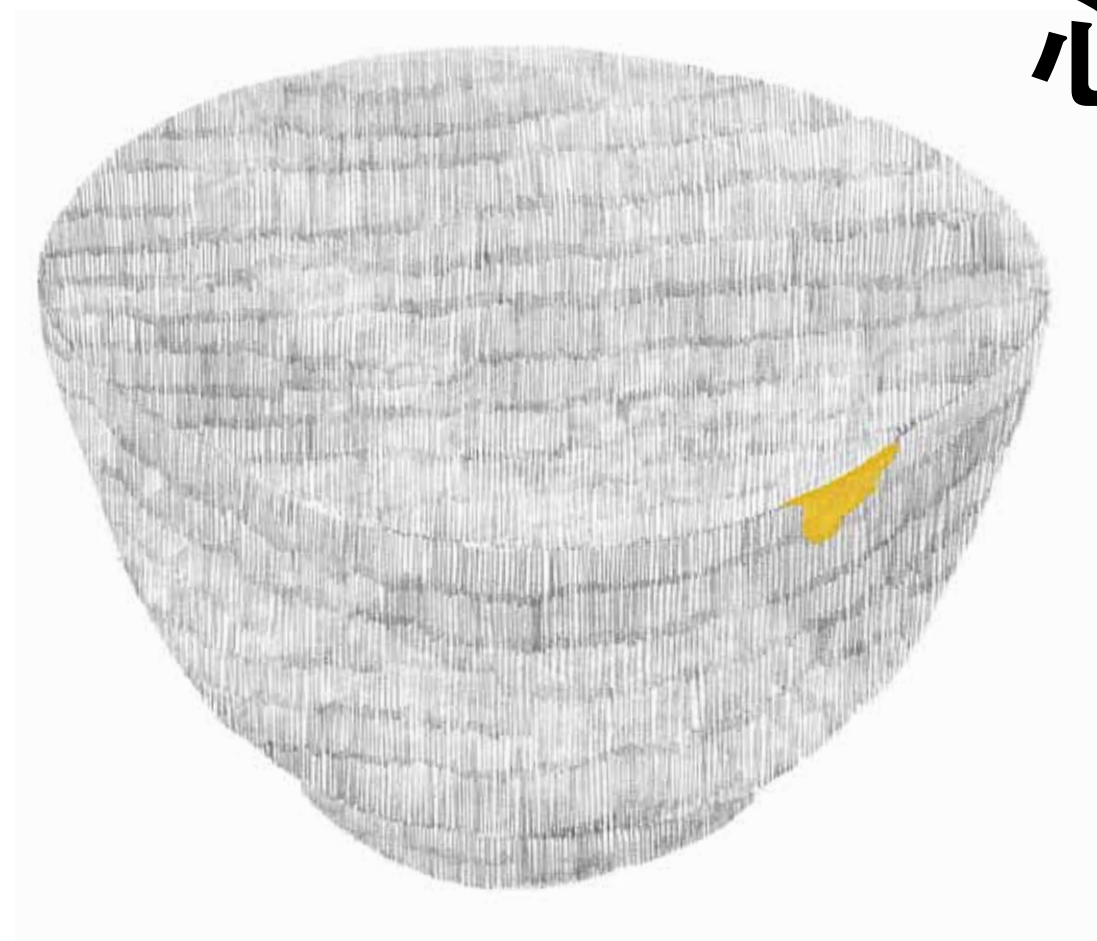


10号目をむかえました。



no.10

繕う



くらし中心

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

くらしの良品研究所 編集発行 2013.03

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。

バックナンバーはこちらをご覧ください。
www.muji.net/lab

無印良品

つくろは糸偏に善の字からなる意味深い文字で、
炉端でつくろいものをする母の情景などが昔の映画のシーンのように思われたりもします。
ものを大切にする。ていねいに暮らす。そこで必要になる仕事を代表する言葉として
「繕う（つくろう）」に注目し、10号を迎えた本誌、くらし中心のテーマとしました。



アフリカで発掘された器に、すでに割れ目をつないだ痕が見えていたので感嘆したことがあります。作ったものをつくろうことが古今東西の飾らぬ真実だと思えたからです。

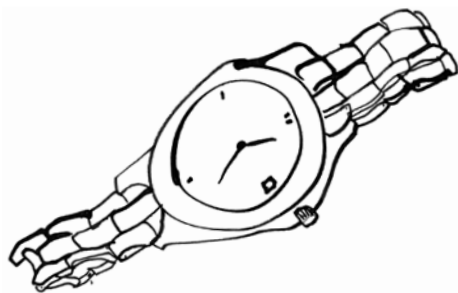
今はスレッドで肌が見えるようなジーンズのパンツに、アップリケのラベルが別の穴をふさいでいるのが分かったりして、それもかっこいい、つくろいの姿といえるでしょう。つくろうには外面をかざるという意味もあるので、どれくらいクリエイティブにできるかも焦点となりそうです。

生活を見回すと、あらゆる素材と用途につくろいは現れています。陶器の金継ぎ、革製品の修繕、木継は家具にも必要な仕事でもあります。サバイバルやエコロジーなどの考え方が共有される現在だからこそ、つくろう、ことの知恵を出し合って行けるのかもしれません。

阪神淡路大震災、東日本大震災の惨禍にあわれた各地の方々に向けて、写真・アルバムなどの再生、修復に力をつくすボランティア活動も生まれました。存在の証しとしての写真、思い出の記録を復元しようとするそれらのお手伝いは、心のつくろいを願ってのこととも言えます。つくろう、には治療する、整える、という意味もあります。厳しい時代には人はやさしくなれると信じて助け合う。そのことが社会の負った溝を埋めていくと考えたいと思います。

時をつなぐ

壊れた時計を修理するより、新しいものを買うほうが手取り早い。
そんな風潮の中で、日本全国や海外からも
修理不能と宣告された時計が送られてくる時計店があります。
時計をよみがえらせる「伝説」の時計職人を訪ねました。



時計に込められた思いを大事にしたい。

広島県呉市の沖合に浮かぶ瀬戸内海の大崎下島。この小さな島に、日本で最も古いといわれる時計店があります。創業は安政5年(1858年)。北前船の風待ち・潮待ちの湊として栄えたこの町で、当時、米問屋や醤油醸造を営んでいた松浦家初代が、本業の傍ら始めた店だといえます。この新光時計店の4代目店主が、「伝説」とまで呼ばれる時計職人の松浦敬一さん。松浦さんの元には全国各地から、ときには海外からも、修理依頼の時計が届きます。他では修理不能と言われた時計でも、ここでよみがえることを知った人たちが、続々と送ってくるのです。

かつて時計は、入学・就職・結婚など人生のさまざまな節

目の記念に、特別の思いを込めて買ったり贈られたりするものでした。そうして手に入れた時計は、ひとりひとりの時間を刻みながら、持ち主の人生に寄り添っていたことでしょう。そんな時計だからこそ、それが壊れたときは何とか

直したい。松浦さんの店に時計を持ち込むのは、そうした思いを持つ人たちです。時計の命には、持ち主の人生や家族の歴史などが重ね合わされているのかもしれない。



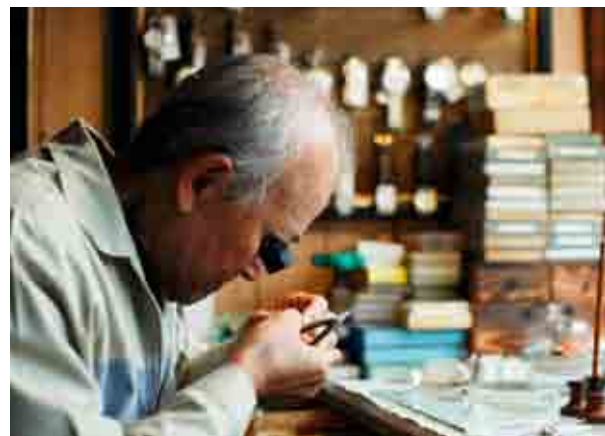
細かい手仕事が好きだった松浦さんは、物心ついたときから見よう見まねで時計を分解したり組み立てたりしていました。まさに門前の小僧で、中学に上がるころには、二代目当主であるおじいさんに「うちのどの職人より、おまえが上手だ」と言われていたとか。腕利きの時計職人だったおじいさんの元には、その当時、弟子志願者が全国からやってきて働いていたといいます。

おじいさんは大阪の問屋に買い付けに行くときも、幼い松浦さんを連れていきました。そのときに問屋の社長から聞かされたのが「三方よし」という言葉。「売り手よし、買い手よし、世間よし」という、近江商人の教えです。この言葉は幼い松浦さんの心に響き、その後の商売哲学となり、そして今日「伝説」とまで呼ばれる松浦さんの心の素地ともなりました。売り手や買い手への「よし」は当然として、一番大切なのは、3つ目の「世間よし」ということ。世間から見て、いい仕事をしているか。社会のためになっているか。今のような時代だからこそ、この3つめの心構えが必要だと松浦さんは言います。



時計がよみがえったことへの感謝の手紙もたくさん。持ち主の喜びを受け止めて、松浦さんの仕事が完了します。

独学で修理の道を究めた松浦さんは、時代が変わってこの町が衰退して行く中でも、商売を続けてきました。多くのものが大型資本に吸収され、他の時計店が店を畳んでいく中、ひたすら修理をし続けてきたのです。そしていつしか、小さな島の時計店は、多くの人の思い出を復活させる時計店として日本中に知られる存在に。そこには、社会の役に立つことが商売の基本だという「三方よし」の精神が息づいています。全国から届く時計には、もはや部品が存在しないものもあるそうです。そんなとき松浦さんは、その部品を作ることから始めます。そして、ひとつひとつに集中するため、ふたつの時計の分解・組立作業を同時進行させることはありません。ま



電気の光より自然光のほうが仕事をしやすいという松浦さん。作業台は、窓に向かってしつらえてありました。

た、狂いが出ないかを見極めるため、修理が終わっても腕時計で最低数日以上、掛け時計などは数週間も手元に置いてチェックすることもあるといいます。

仕事のコツを訊くと、「想像力」という答えが返ってきました。実際、正常に動く姿を見たこともないような古い時計がたくさん持ち込まれるのですから、想像しながらやるしかありません。ここには、どんな部品が付いていたのだろう？こっちにもバネがあったのでは？——拡大鏡の奥にある繊細な部品を組み上げていく中に、松浦さんにしか見えない、もうひとつの世界があるようです。

そして、その想像力の源になるのは、時計の持ち主の「思い」。修理を依頼される時計のひとつひとつには、依頼主の思いを切々と綴った長い手紙が添えられています。そして、その思いに応えるために、松浦さんは想像力の翼を広げて時計と向き合います。

時計は、時を刻みながら、その時その時の記憶を刻んでいきます。「時計には、その人その人の時間が刻まれている。だから、時計そのものよりも、時計に込められた思いを大切にしたい」と語る松浦さん。時計を修理するという作業は、依頼主の記憶や思い出を繕う作業なのかもしれません。



右: 松浦 敬一 新光時計店4代目
左: 松浦 光司

父の背中を見て育ち、家業を継ぐ決意をして故郷に戻ってきた息子・光司さんと。松浦さんの技術力が知れ渡る火付け役になった新光時計店のホームページは、光司さんが制作したものです。

新光時計店
www.shinko-tokei.jp

包丁を研ぐ

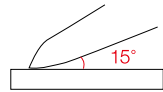
玉ネギを切って涙が出るのは、切れない包丁のせいだと言われます。
そうとわかっていても、砥石を使って研ぐのは
多くの人にとって高いハードルでしょう。そんな人のために、
研ぎの技術を伝えようとする若き包丁研ぎ師がいます。
その手ほどきを受けるため、松阪の刃物店まで行ってきました。



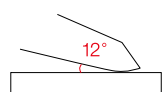
研ぎ始める前に、まず面直しをして砥石を平らにし、新品のような状態に戻します。



表面は砥石に対して45度の角度に刃を置き、約15度浮かせて一様に研ぎます。



裏面は、表面ほど浮かせず研ぎます。研ぎの割合は、表7割に対して裏3割程度。



研ぎ終わったら、めくれあがった刃先の金属(バリ)をタオルでこすって取り除きます。

包丁は、研ぐことでチカラを発揮する。

包丁を携えて私たちが訪れたのは、三重県松阪市にある月山義高刃物店。手ほどきをしてくれたのは、その店の3代目、藤原将志さんです。藤原さんは、大学卒業後の4年間、東京の刃物会社で修行しました。一日10本の包丁を研ぎながらお客さんに接する中で見えてきたのは、「切れる」という感覚を知らない人が多いのではないかと。鶏肉の皮をキッチン鋏で切る人、切れ味の悪い包丁で力を入れすぎて肩凝りまで起こしている人…切れない包丁の切れ方が「普通」だと思ってしまう、「切れる」という感覚がわからなくなっているようです。日本人が持つ「切れ味」の感覚が失われつつある…そんな危機感を持った藤原さんは、その感覚を守っていくために、研ぎに関する技術と知恵を分かち合うことにしました。そして故郷で始めたのが、一日一組、無料で研ぎを教える講習会です。

「研ぎは決して難しいものではありません。学べば誰にでも出来るようになります」という藤原さんの言葉に励まされて、私たちも早速、実技指導を受けることにしました。

使う道具は砥石ですが、それと合わせて必要なのが「面直し」。砥石を平らに直すための砥石です。砥石は包丁を研いでいるうちにどんどん凹んでいき、そこに刃が当たらなくなるだけでなく、その状態で使うと刃が曲がってしまうのだとか。研ぎの途中も、藤原さんは5～10分おきに面直しを当てて砥石を平らにします。砥石は、そのくらい減りが速いのです。

研ぎ終わった包丁で新聞紙を試し切りしてみると、片手で持った新聞紙がすーっと切れます。このとき引っかかりがあれば、その部分の研ぎが足りないということ。もう一度同じ作業を繰り返します。こうして仕上げた包丁で、トマトを切ってみました。皮の抵抗感もなく、向こうが透けて見えるほど薄くきれいに切れます。

簡易研ぎ器では、とてもこうはいかないでしょう。藤原さんは、決して簡易研ぎ器を否定しているわけではありません。ただ、簡易研ぎ器の場合は、研ぎ器の研磨部位も金属なので摩擦して研磨力が落ちること、研磨力が落ちた研ぎ器で包丁を研ぎ続けると刃をつぶしてしまう恐れもあること——こうしたことを知った上で使ってはいいと言います。また、簡易研ぎ器は刺身包丁や出刃庖丁などの片刃の包丁には対応していないものがほとんどだとか。「簡易」という名前が付いているくらいですから、定期的に砥石で研ぐ合間の「つなぎ」的な役割と考えたほうがよさそうです。



こうして教わってみると、基本を知りコツを押さえれば、包丁研ぎは誰にでも驚くほど簡単に出来るものでした。そして、もうひとつ驚いたことがあります。それは、「ほとんどの包丁が、新品のままでは50%の力しか発揮できていない」という藤原さんの言葉。どんなに高価な包丁でも使っていくうちに切れ味が悪くなるのは、包丁という道具の定めのようなもので、包丁を使う人なら誰でも知っています。しかし、買った時点の能力が100%ではなかったとは…。つまりほとんどの包丁は、「買った人が研ぐ」ことを前提に作られた道具だったのです。

研いだ包丁を、自宅で使ってみました。これまでと同じ切り方なのに、玉ネギのみじん切りをしても涙が出ません。ネギの皮がつかがることもありません。包丁ひとつで、料理がこんなにもスムーズに運ぶとは。心なしか、いつもよりおいしく出来たような気がします。「繊維がつぶれないので、味も滲みやすくなります」という藤原さんの言葉を思い出しました。

日本料理の基本は、包丁使いです。「研ぎによって日本の食文化を伝承したい」という藤原さんの思いも、切れる包丁を使ってみて、初めてわかる気がします。「捨てずに永く使い続けることが本当のエコであり、ものを大切にする日本の文化」と語る藤原さん。道具への愛着は、手入れをしながら使うことで増してくるのでしょうか。そして何より、切れ味のよい包丁は使って楽しいもの。研ぎは、毎日の料理を快適にするための工夫のひとつとも言えそうです。

藤原さんの店にある砥石のいろいろ。家庭で研ぐなら、まずは中くらいの粗さの中砥(左ページ写真1の黄色い砥石)がひとつあれば事足ります。



藤原 将志 月山義高刃物店3代目
大学卒業後、東京の大手刃物店、株式会社木屋に入社。有名百貨店の刃物売場責任者を務める。2010年退社し、月山義高刃物店を継ぐ。機械を一切使わない完全手研ぎの技術を究めながら、研ぎの普及のために無料講習会を開いている。

月山義高刃物店
www.tsukiyama.jp

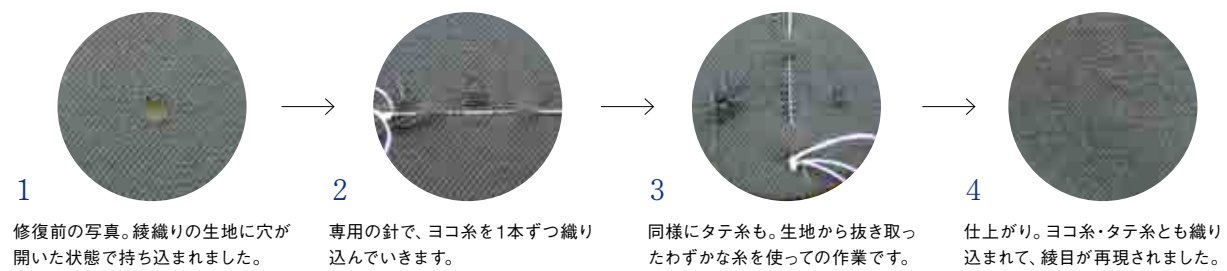
かけはぎという仕事

糸偏に善と書くように、「繕う」とは、糸を使ってよりよくすること。

文字通りの繕いとして、古くから受け継がれてきた手仕事に

「かけはぎ」という修繕方法があります。高度な技術と情熱で、

修理加工のプロからも全幅の信頼を得ている、かけはぎの匠を訪ねました。



1

修復前の写真。綾織りの生地に穴が開いた状態で持ち込まれました。

2

専用の針で、ヨコ糸を1本ずつ織り込んでいきます。

3

同様にタテ糸も。生地から抜き取ったわずかな糸を使っている作業です。

4

仕上がり。ヨコ糸・タテ糸とも織り込まれて、綾目が再現されました。



針と糸で、衣類がよみがえる。

虫食い、かき裂き、擦り切れ、焼け焦げなど、衣類はさまざまな原因で傷や穴になります。そんな傷穴を修理・復元する技術が「かけはぎ」。いまではほとんど聞かなくなった言葉ですが、ある年齢以上の方には、靴下などの繕いをする母の姿と重なる懐かしい言葉かもしれません。

この言葉を聞かなくなったということは、日常的に衣類を繕う人が少なくなっていること。新しいものを買った方が安いから、繕う時間も技術もないから、と理由はいろいろ考えられます。では、繕ってでも着つけたい大切なものは、どうすればいいのでしょうか？そんなときに、高い技術を持つかけはぎ専門の技匠という存在があります。

名古屋に本社を持ち、横浜元町、京都円町、東京葛飾にも支店をもつ「かけはぎ工芸織本」。その代表取締役である松本文孝さんは、名古屋で50年続くかけはぎ専門店の長男に生まれ、幼い時からお父さんの仕事をずっと見て育ちました。「自分自身がこの仕事を心底やりたいと思ってこの世界に入り」、1986年に独立・創業。2002年には横浜元町に支店を出しました。昔はテーラーやクリーニング店からの仕事が多かったようですが、バブル崩壊後はリフォームショップからの仕事が増えたとか。松本さんは高い技術力で確固たる信頼を築きながら、その技術を社員にも伝授していきました。「本当は、人に教える時間も惜しいんです。

そんな時間があつたら1点でも多くかけはぎをしたい」—松本さんは、根っからの「職人」です。そして子供たちも手が離れた2010年、かけはぎに専念できるよう、京都に店を出しました。他に職人を置かず、奥さんと2人だけでやる店です。「今は毎日が楽しくて、うれしくてしょうがない」と語る松本さんの目は、少年のように輝いています。

京都に居を構えて3年、京都ならではの依頼も増えてきました。着物の機元(はたもと)やブライダル関連の依頼、そして能舞台の上に張られる幕や美術工芸品のようなものまで持ち込まれるのは、まさに土地柄なのでしょう。

「ちょっとやってみましょうか」と松本さんが手に取った依頼品は、5mmほどの穴が開いたジャケットです。にこやかに話をしていて松本さんの目が、プロの職人の目に。裏地を少しはずして、縫い返しの部分から数本の糸を抜き取ります。そして、専用の針を使って縦糸と横糸を1針1針入れて織り上げるように生地を再現していきます。欠落していた部分に縦横に新たに織られた部分は、仕上げのアイロンと糸のつや消し作業で全くわからなくなりました。これぞ匠の技。要した時間は、わずか15分です。「織り込み」というこの技術ができるのは、全国でも数社だけだとか。1cmあたり税込み630円(最低工料:税込4,200円〜)は、充分に価値のあるパフォーマンスです。

「いいものをいつまでも大切にしたいというお客様のために、心をこめて修理しています。残念ながら見積りの段階でおやめになる方もある反面、最近は若い方にも知っていただいて『彼女にプレゼントされたものだから…』『就職して最初に買ったスーツだから…』など持ち込まれるケースも増えていきます。ご購入の際に付いている共布(ともぎれ)や裾上げ時に余った布は必ず保管しておくことをお勧めします」とのこと。「お時間は通常で1週間。でも関西の人はせっかちだし、ご相談に応じて急ぎでもやります。元町の店では、あらかじめご予約いただければ、中華街でお食事している時間で仕上げることも可能です」「お客様のご要望に常にお応えしたいから、東京と横浜の店は年中無休です」松本さんの店のファンが多いのは、技術の確かさに加えて、こうしたお客様視点での企業努力も理由のひとつでしょう。

現在、店にいる職人さんは20人。持ち込まれる生地も複雑なものが増えてきて、一人前になるには10年ぐらいかかると



かけはぎに使われる道具類。専用の針と糸は特注品で、これを作ってくれる職人も減ってきたといいます。

いいです。「服飾の専門学校などに求人も出しますが、なかなか長続きなくて…」と松本さん。その一方で、こんな話も聞きました。「大学の法学部を出た長男が急にあとを継ぐと言い出して…今は東京の店を任せているんです。そんなことなら、中学を出てすぐ修行を始めればよかったのに…」そう語る松本さんの目は、言葉とは裏腹にとてもうれしそうです。きっとこの息子さんも、「親の背中を見て育ちましたから…」と答えるのでしょう。

よいものを永く大切に使いつづけるためには、松本さんのような職人の存在が不可欠です。需要の落ち込みや後継者不足から、手仕事が無くなっていく昨今。かけはぎという繕いの世界へ飛び込んできた3代目にエールを送りたいと思います。



松本 文孝 代表取締役
名古屋のかけはぎ専門店の長男に生まれ、1986年かけはぎ工芸織本を創業。現在は、名古屋、横浜、京都、東京に4店舗展開。その高度な技術に支えられ、信頼を寄せる個人・取引先多数。

かけはぎ工芸織本
www.kakehagi-orimoto.jp

こころを繕う

繕いの対象となるのは、モノだけではありません。

東日本大震災の津波で傷んだ写真を修復するボランティア活動などは、思い出をまもり、こころを繕う手助けとも言えるでしょう。

その中心になって活動している工学院大学で話を聞きました。



写真を繕うことは、思い出を繕うこと。

3月11日の東日本大震災は、尊い人命だけでなく、過去からつながった多くのものを奪い去りました。その中には「写真」もありました。後に瓦礫の中から探し出された写真も、海水や泥をかぶって激しく汚損されていたのです。そんな被災地の惨状を目の当たりにして、ひとつのプロジェクトがスタートしました。社会貢献学会東日本大震災支援委員会のもとで、工学院大学と神戸学院大学が共同で取り組む「あなたの思い出まもり隊」。津波で汚れたり傷ついたりした写真を修復して、持ち主の元に送り返そうという活動です。まず神戸学院大学でスタートし、3ヵ月後に工学院大学の新宿キャンパス内で活動を始めたのは平成23年7月25

日。パソコンソフトを使い慣れている理系大学の強みと、学生以外の一般ボランティアも参加しやすい首都圏という立地を生かしての活動開始でした。始めてはみたものの、写真修復のノウハウは皆無です。目の前の写真は修復できるのか？アルバムの台紙から写真をはがす方法は？写真の洗い方は？…わからないことだらけで、最初のうちは月に100枚がやっと。「こんな調子で終わるのだろうか」と不安でしたが、企業からの画像処理ソフト・機材提供や技術指導支援もあって、スキルアップなどすべてのことが積み重なっていき、だんだんペースが上がっていきました。

作業の中心を担うのは、大学生を中心としたボランティアです。被災した人から送られてくる写真を、汚れ具合や傷み具合によって修復できるものとそうでないものにと選り分け、修復できるものは表面の汚れを丁寧にに取り除いていきます。拭いても取れない汚れは、写真をスキャナーでパソコンに取り込み、画像処理ソフトを使って、シミや汚れを除去。欠けてしまった部分には周辺の画像を参考にした新たな色をのせて、元の画像に限りなく近い形に修復していきます。修復にかかる時間は、写真の内容や汚れの程度によって異なりますが、簡単なものなら1枚10分程度。難しいものだと3～5時間かかることもあるという地道な作業です。

取材した日に作業していたのは、学生と社会人ボランティアと合わせて12～13人。黙々とパソコンに向かっていた中年の男性は、ニュースを見てこの活動を知り、昨年6月から仕事の合間に週に一回くらい来ているといいます。「何かでお手伝いしたいという思いがあったから。まだ新米で何もわからないが、学生さんたちが手取り足取り教えてくれる」とも。ボランティア活動をしたくても被災地までは足を運べない人たちが、普通の生活をしながら参加できるところが、この活動の特長でもあるのです。

多くの人に参加してもらうための工夫もありました。写真洗浄・スキャニング・修復などの作業のコツと手順を示した作業マニュアルと、全体の運営の流れをあらわす管理マニュアルを作成し、それをどんどんバージョンアップしていくことで、作業を可視化しスピードアップにもつなげていったのです。このマニュアルは、最終的には計約120ページの「写真修復マニュアル」としてまとめられ、同様の活動に取り組む団体に無料配布されています。ノウハウを蓄積し多くの人と共有することで、ボランティアの輪を広げていきたいという考えからです。そしてそれは、次に来るであろう災害に備えて、分散してできる体制をつくるためのものでもありました。実際、アメリカのハリケーン災害のときも、このプロジェクトの支援企業に対しマニュアルや活動についての問合せがあったといいます。

家族の成長記録、記念日や行事の記録、旅行の情景…さまざまな場面で撮影されてきた写真は、個人や家族の歴史であり、思い出の宝庫です。「送られてきた写真の1枚1枚に込められた家族の思いを感じる」と語るのは、学生スタッフとして現場を仕切っている和久さん。「写真は過去と未来をつなぐものだから、なんとか残してあげたい」と強く思い「誰かがやらなければならないことなら自分がやろう」と、この活動に加わったといいます。外部ボランティアをまとめている大学院研究生の平本さんは、修復した写真を手渡すために気仙



壁には修復された写真を受け取った依頼者からの礼状が貼られ、ボランティアの人たちの励みになっています。

沼まで行ってきました。期待と不安を抱えての訪問でしたが、依頼者は一枚一枚の写真を手に取って懐かしみながら、撮影時の状況やこのプロジェクトを知ったきっかけなども話してくれたとか。写真を手に家族の歴史を振り返る人々の姿を見て、まだ終わっていない写真も頑張って修復し早く持ち主の元に返したいと、気持ちを新たにしたいといいます。1枚でも多くの写真が持ち主の元に戻り、被災地の復興や生活の再建を進めていくうえでの支えになれば——それは、この活動に携わる人たちの共通の思いです。修復した写真を送り届ける際には、必ずその写真修復に関わった人たちのメッセージを添えることにしているのも、そんな思いから。修復された写真を手にした人たちは、幸せの証しを取り戻すとともに、そこに関わった人たちの「思い」も受け止めることでしょう。そしてそれは、震災で傷ついたこころを繕うことにつながるのかもしれません。

修復活動を告知するチラシ。作業の流れや発送時の注意事項なども、細かく書かれています。



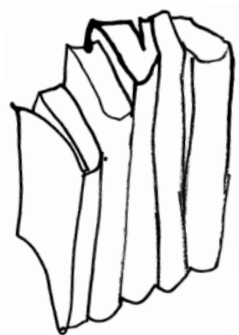
中：村上正浩 工学院大学建築学部准教授
社会貢献学会理事。東日本大震災後、学生ボランティアとともに被災地の復興支援に取り組む。専門は、都市防災、建築防災、都市計画。

左：和久里洋 学生ボランティア代表
右：平本達也 学生コーディネーター

社会貢献学会 東日本大震災支援委員会
<http://js-ss.org/news/information/entry-67.html>

ルリユール もう一度つなぐ

「ルリユールおじさん」という絵本があります。
大切にしていた本を壊してしまった少女が、ルリユールという職人に会い、
その本をよみがえらせてもらうまでの物語です。
ヨーロッパには、綴じ直したり表紙を付け替えたりして本を繕う伝統がありました。



繕うことで、本に新しい命を吹き込む。

「ルリユールおじさん」の主人公は、ソフィーという本好きの少女。大切にしていた植物図鑑を落としてしまい、その本が壊れてしまったところから物語は始まります。「本やさんにはあたらしい植物図鑑がいっぱいあった。でもこの本をなおしたいの」と言うソフィー。「そんなにだいじな本なら、ルリユールのところへ行ってごらん」街の人が教えてくれました。「ルリユールって、本のおいしゃさんみたいな人？」意味もわからないままにルリユールを探すソフィーは、やっとその看板を見つけます。ルリユールとは、フランス語で「製本」を意味する言葉。ヨーロッパでは数百年の伝統がある製本・装丁の手仕事です。「こんなになるまで、よく読んだねえ」と

ほめてくれたルリユールおじさんは、その本を「なんとかしてあげよう」と約束します。綴じ直すためにまず一度本をばらばらにして、ていねいに糸でかがり、のりで固め、背表紙をハンマーで叩いて丸みをつけ、表紙の革と紙を選んで…おじさんの手仕事は続きます。そして翌朝、生まれ変わった植物図鑑がソフィーを待っていました。しかも、ソフィーの大好きなアカシアの絵のページが表紙になって。わたしだけの本——ソフィーのその言葉が、ルリユールの仕事のすべてを語っていると言えるでしょう。作者のいせひでこさんは、「書物という文化を未来に向けてつなげようとする手職人の強い矜持と情熱に惹かれ」て、この本を書いたといいます。

絵本「ルリユールおじさん」いせ ひでこ・作、講談社



1949年刊フランスの仮とじ詩集をかがり台で綴じています。現在のくみ製本につながる初期の方法で仕立てます。



藤井さんが主宰する教室では写真集や手帳の表紙の制作も。家族や子どもの写真を持参する人も多いといいます。

世界にひとつだけの本をつくる。

そもそもヨーロッパでは、機械による製本が発達する以前の本は、すべて「仮とじ」の状態で出版・流通されていました。仮とじとは、本文を束ねて簡単に糸でかがって冊子にしたもの。人々はこの状態で本を購入し、近くの製本工房へ注文して、ハードカバーの本の形にしてもらっていたのです。こうした歴史の中で、「ルリユールおじさん」に出てくるような繕いも、ごく自然に行われてきたのでしょう。日本に伝えられたルリユールは、繕うというより製本工芸の色あいが強いのですが、手を加えることで世界にふたつとない本をつくり出すという意味においては同じです。

造本作家であり版画家でもある藤井敬子さんがルリユールの世界に入ったきっかけは、自分の版画作品を美しく保存したいという思いからでした。手書きの絵や文字をまとめる作業は、活字が発明される以前の写本時代の書物と同じスタイルです。その時代にはすべて、世界にたった1冊しかない本ばかりだった。そのことに気づいたとき、藤井さんの中で製本工芸がぐっと身近なものになったといいます。その面白さに目覚め、いつの間にか本を作る方が本業になっていきました。

藤井さんの主な活動は、ルリユールの受注制作と製本の指導。美術館や図書館、大学などで製本やブックアート講座の講師をし、NHKテレビの「趣味悠々」でも製本入門の講師を務めました。美術館で毎年行っているのは、絵や写真、ハガキなどを綴じるワークショップ。参加者の多くは子どもの描いた絵を持参するといいます。3時間のワークショップでは、参加者それぞれが好きな文庫本を持ち寄って改装することも。手帳やノートを製本することだってできます。「ルリユールがもっと日常的になり、愛読書や家族の思い出を自ら改装したり、製本家に注文して作ったり、そんな

な豊かな環境になったら」という藤井さん。今後は銀座でもカルチャーセンターの講師を引き受け、多くの人に手仕事の楽しさを伝えようとしています。
ルリユールの出発点は、本への愛。「何度も読み返してきた本に強さと美しい装いを加えることで、かけがえのない1冊になる」と藤井さんは語ります。「『ルリユール』という言葉には、『もう一度つなげる』という意味もあるんだよ——「ルリユールおじさん」の台詞は、繕うことで本の中に詰まったものを未来へつなげるという意味にもとれそうです。
本の世界でも電子化が進む時代ですが、その便利さを享受する一方で、お気に入りの本だけは大切に繕いながら手元に置いておくという豊かさもあるでしょう。知識を得るためだけに読むのではなく、紙の手触りや重みなども合わせて五感で味わう。紙の本には、そんな楽しみもあったのを思い出しました。



ルリユールに欠かせない道具たち。自分の使いやすいようヘラは紙ヤスリで削ります。



藤井 敬子 造本作家・製本家
京都で日本画と版画を学んだ後、1986年から、日本にルリユールを広めた橋折久美子さん主宰の「橋折久美子ルリユール工房」(池袋西武コミュニケーションカレッジ)で製本技術を学ぶ。1999年、版画製本工房を開設、東京製本倶楽部を設立。

アトリエ・リヴス
www2.ocn.ne.jp/~reliu/

靴磨きのプロに聞く

「繕い」を広くとらえれば、汚れたり壊れたりする前に行う「手入れ」も繕いの一種です。ふだんの靴磨きは、その代表的なもの。東京・有楽町の駅前で数多くの常連客をもち、知る人ぞ知る靴磨きのプロ、千葉尊さんに話を聞きました。

必要なのは、汚れないための手入れ。

千葉さんが率いる「千葉スペシャル」は、有楽町の駅前で営業する靴磨きのスペシャリスト集団。その仕事ぶりに惚れ込んで、15年以上通い続ける常連客もあるといいます。チームの仕事を際立たせているのは、千葉さんが開発した特殊なクリームです。もともと原子力発電所の設備メンテナンスを行う技術者だった千葉さんが、その経験から得た知識をもとに、革を劣化させない素材を吟味して独自に調合し、3年かけて完成したものだといいます。

そのクリームで、実際に靴を磨いてもらいました。布で汚れを取った後、ブラシでコバ（縁の糸目の部分）にしっかりクリームを塗り込み、次に布を指に巻き付けてクリームを革に押し込んでいきます。使うのは、やわらかいクリーム、かためのクリーム、仕上げのクリームと3種類。わずかに10分の作業で別物のように輝くさまは、まさにプロの仕事です。一般に革製品の手入れというと毎日のように磨いているイメージがありますが、本当にしっかりと磨いたものは簡単な手入れですむのだとか。実際、千葉さんが調合したクリームで磨いた靴は、固く絞った布で時々水拭きするだけで、1ヵ月は輝き続けるといいます。

このクリーム、残念ながら一般で手に入れることはできませんが、代用品としては「米ヌカを布袋に入れてこするのが一番」と教えてもらいました。「唾液もいいけど、ニオイがするのが欠点」とか。唾液と同じ成分の「乳清」と呼ばれるヨーグルトの上澄み液を使うのもいいそうです。

「磨いてもツヤを持続できなければ、安物の靴を買って“履き捨てる”感覚になる」千葉さんが危惧するのは、靴磨きのまずさから生まれる使い捨ての風潮です。「安い靴が増えるほど手入れの熟度も下がっていく」ことを実感するのだとか。「“安物だからいいや”と粗末にするのは、人間性の低下につながると思う」という言葉には、足元から時代を見つめてきた人ならではの説得力があります。靴磨きとは、後始末ではなく、汚れる前に保護するためのもの——靴磨きのプロの言葉は、示唆に富んでいました。



この仕事を始めたときから、「10分以内で鏡面磨き」をモットーに技術を磨いてきた千葉さん。その手にかかる、みるみるうちに靴がピカピカになっていきます。



千葉 尊 千葉スペシャル代表
企業経営者や熱心なファンの呼びかけで昨年9月より、東京・有楽町駅前東京交通会館の1階で営業再開。ユニフォームは某アパレルブランドが、顧客用の椅子は大手ディスプレイデザイン会社が企画・提供しました。

千葉スペシャル
東京交通会館1F

手が動きだす

「繕う」には、修繕するだけでなく、整える、よそおうといった意味もあります。心にかけて、手をかけることで、モノの命を生かし、永く保つ。そんなていねいな暮らしを実践している方々の実例を集めました。

手が動きだす ①

子供服が生まれるとき

生まれてきたチビたち（孫）のために、家族が着てきたものを生かして新しい服をつくるのがとても楽しくなってきました。着古した服は人の肌のような暖かさがあります。リサイクル、リメイクというより楽しんでつくることが何より大事だと思います。

- まず素材。風合い、肌触り、色などがアイデアをそそります。いつも身近にあるものを見ていて自然に生まれてきます。
- 既成の服からアバウトに型紙を作ります。ゆとりを持った方が着せやすく、いいと思います。
- 道具は大切。市販の薄い透明のホック、首周りなどはバイヤステープなど使用するといでしょう。スイス製のコンパクトなミシンを愛用しています。

栗辻 早重：デザイナー



手が動きだす ②

ブラッシングで長持ちさせる

冬に活躍する、ウールを始めとする天然素材は常に呼吸をしています。手入れを怠ると繊維に入り込んだ埃などがその通気性を妨げ素材の弾力が無くなり、生地が艶を失っていきます。そこで、革製品と同じように、生地や用途に合わせてお手入れが大切です。こまめなブラッシングで見違えるほど良い状態にもどり、クリーニングに出す回数も減らせます。大切な衣料を長く使うためにぜひお奨めしたい方法です。

庵 豊：クリエイティブ・プロデューサー



手が動きだす ③

まだ使えるものの魅力

二人で生活をはじめる時、1台の8ミリカメラを買いました。カメラは、カタカタカタと電池で動きます。これまで2度動かなくなり、同じカメラで新しい物はもうないので専門の所で修理をしてもらいました。3分間しか撮影できず、音声も録れません。出来上がった映像は、記録というよりも、やわらかい記憶といったおもむき。ときおり、壁に映して家族と一緒に見ます。映像の中の風景は、それぞれの記憶の断片を集め、暮らしの思い出をやさしく繕ってくれるようです。古い機械なので、いつかは動かなくなる日も来るでしょう。願わくば、娘が大人になるまでは動いてほしいものです。

新見拓也・新見祐紀：デザイナー



手が動きだす ④

ゆうべの残りもの

どうしてもおかずが残ってしまうことがあります。いつまでも冷蔵庫に入れておき、結局捨てるなんて忍びない。ちょっとしたアイデアで、残りものが変身します。例えばタベの残りの肉じゃがを、トルティーヤ（スペインオムレツ）風にして朝ごはんに。ご飯にもパンにもあいます。バジルなどを加えるとさらにおいしい。また、しょうゆ味とチーズは相性がいいので、肉じゃがにチーズをのせて焼くだけです。グラタンも好評です。その他、残った天ぷらは甘辛く煮て天丼に、炊き込みご飯もオムライスやおじやなどにリメイクすると、家族も残さず食べてくれます。

野中 公子：くらしの研究者



■ つくり方

- ① 汁気を切った肉じゃがをつぶす。
- ② 卵をかき混ぜて塩コショウ少々したものに①を加えて混ぜる。
※刻んだバジルやパセリを加えると色どりもよく、おいしい。
- ③ フライパンにオリーブオイルを軽くしき、熱くなったら②を流し入れる。
- ④ 蓋をして弱火で3分。ひっくり返して2分が目安。ひっくり返す時もう一つフライパンを使うと上手にできる。

手が動きだす ⑤

表札も手入れする

うちで唯一結婚して以来使い続けているものがあります。それは、玄関の表札です。結婚して初めて帰省したとき、広島の本通りに出ていた出店で木製の表札に名前を書いてもらいました。名前が入ったときの感動は新しい人生のスタートを再び感じさせました。以来40年近くになるでしょうか。風雪に傷み変化しながらも、うちのひとが彫刻刀でまわりを削って新しくして、今も玄関の外にかかっています。なんと、古びてはいるけれど、うちの歴史そのものだと思っているのは当家族だけでしょう。新しくしようという声があがりませんので、きっとこのまま削ってのリニューアルは続いていくことでしょう。

村上 恵都子：フラワーショップ経営



手が動きだす ⑥

思い出の2枚でつくる

「断捨離」という言葉を初めて聞いたのは、確か2年くらい前でした。私自身は整理整頓が上手く、自然と断捨離の考え方が身に付いていると思っていました。しかし見回してみると、「いったん捨てて、それを拾って解体したもの」があちこちに散在しています。あちらの袖をこちらに、こちらのポケットをむこうのズボンへ、という具合です。整理整頓は上手いと自覚していた私にとっては、少しショックでした。例えばフツのVネックのラムセーターは、中学・高校時代から着ており、数えると10着近くになっていました。シンプルなカタチをしているので、色違い二枚を同じようにカットして組み合わせれば流行のカラーブロックセーターになります。ジャケットやコートの裏地と組み合わせ、新たなデザインの一着になります。ほかにもブルゾンやコートもあり、すべてが思うように仕上がるにはいったい何年かかるのやら…。

上野和広：NUNOテキスタイルデザイナー



手が動きだす ⑦

パッチワークでつくる

「風とともに去りぬ」でスカーレット・オハラがカーテンで作ったドレス。色はグリーン。私がNYで見つけたカーテンスカートはオレンジ色。8年前、若いデザイナーが街頭で売っていた服の一つです。カーテン、シーツ、テーブルクロスなど、家にある布で作った、かなりファンキーなコレクションでした。思わず、映画の1シーンを思い出し、衝動買い。若者の育った環境は、どんなだったろうと想像が広がりました。服に使っている光沢のある黒い布は、スリットヤーンで、たぶん日本製だと思います。映画の中では、カーテンの素材が大きな役割を果たします。ベルベットのカーテン素材は、家族の階級を表していました。一方、このスカートに寄せられた布地は、彼の生活と時間が、そのまま留まったパッチワークです。私は「人柄のパッチワーク」と呼んでいます。

須藤 玲子：NUNOテキスタイルデザイナー



手が動きだす ⑨

網の修繕

当店では、お客様にお出しする川魚を近くを流れる鴨川で投網を使って生け捕りにします。獲れるのは、はや、もろこなどの川魚。水槽で泳ぐ川魚を唐揚げや天婦羅にしてお出ししています。父（店主）はいつも、網打ちに行った翌日、網が乾いたら必ず、穴があいてないか、重りがはずれてないか等をチェックし、修繕する所は、専用の針と糸を使って直したり、引っかかった枯れ葉などを丁寧に掃除していました。おかげで50年来愛用の父の網は、大変長持ちしていて、手ほどきを受けて特訓中の私にとってもよき相棒になりそうです。人も、メンテナンスをしっかりとしていれば、長持ちするのでしょうか？父にはいつまでも元気で板場に立ってほしいと思っています。

浅井 喜美代：割烹『喜幸（きっこ）』料理人

手が動きだす ⑧

指先のほつれを縫って

フランスに留学していたときに、母がイタリアで買って送ってくれた手袋です。一人暮らしを始めて間もない頃、生活にも少しずつ慣れてきた頃に届きました。イタリアから、「荷物を送ったよ」との電話があり、日本との距離を考えればイタリアなんてすぐ近く、だったら会いに来てくれればいいのにと思いますが、フランスの寒い冬をあたたく過ごせるようにと選んできたのがうれしかったです。黒革で見た目はごつごつした印象ですが、指を入ると女性らしいライン、内側はカシミアで覆われていてとても暖かです。もう10年以上使っているので、数年前からは指先がほつれ始めて毎年のようにちくちく縫っています。20代の自分には少し大人びたデザインでしたが、繕いながら年々自分の形になってきています。

都筑晶絵：製本家



手が動きだす ⑩

Shipshape 船を船らしく保つ

船乗りの世界には Shipshape という言葉があります。船を船らしく（あるべき姿に）保つという意味です。清掃、整理整頓から始まって、ロープのほつれ、セールの補修、ペンキ塗り… 船を安全に、そして快適に走らせるための基本です。帆船であるヨットにとって、セールのちょっとした破れ、ロープのほつれは風や波の予想外の力によって拡大し重大なトラブルを招きます。ですからヨット乗りがそうしたほころびを見かけるととても気になります。セーリングから港に帰ると誰からともなくリペアーキットを持ち出し、気になる個所の補修にかかります。繕うことはヨット乗りにとって日常そのもの、日々繕いの連続です。欧米のヨットハーバー

では船齢が100年近くなる木製ヨットを数多く見かけます。そのほとんどはクラシックな船体を真新しいペンキと重厚なニスで塗り上げられ、真鍮の船具がピカピカに磨き立てられた、まるで工芸品の様な美しい船達です。Shipshapeの極致です。そこまではとても届かない我々のヨットライフですが、それでもゆっくりと揺れるデッキの上で、日向ぼっこをしながら、無心に針を動かし、時に傍らのウイスキーを舐める…至福の時間と思いませんか？ Shipshapeのプロセスを楽しむこと、つまり繕いそのものもまたヨット遊びなのです。

児玉 萬平：40フィートヨット「Thetis 4」
艇長、会社経営



手が動きだす ⑪

ネクタイでネックレス

夫が定年退職になり、冠婚葬祭以外はネクタイを締める機会もほとんどなくなりました。お役御免となった大量のネクタイは、洋服筆筒の中で場所ふさぎです。かといってゴミに出すのも忍びない気がして、捨てられずにいました。そんなとき、同年代のお友だちが教えてくれたのが、ネクタイを再利用したネックレスです。ネクタイ1本から、ネックレス1本。夫の長い勤務生活に付き合ってくれたものが、いまは私の胸元を飾っています。「へえ、そんなになったのか」と、夫もなんとなく嬉しそうです。何本も作って、お友だちにもプレゼントして喜ばれています。

水落 美登利：学習塾経営



■ 材料

ネクタイ1本
（手洗いで、ほどこき、アイロンをかける）
発砲スチロール玉（20mm）×9個
ウッドビーズ（14mm）×8個

■ つくり方

①生地を中表にし、型紙の直線部分を輪にして型紙を置き、待ち針で止め、そのまま裁断する。（型紙は約1センチの縫い代込み）

②端から12センチ縫い、発砲スチロール玉を入れるための開け口を6cmとり、その先は端っこまで平縫いする。

③開け口から指を入れてひっくり返し、開け口でない方の端から16cmくらいのところを軽く「たんこぶ結び」にし、開け口から発砲スチロール玉を中に入れ、次に開け口のほうの端からウッドビーズを通す。これを繰り返す、最後の発砲スチロール玉を入れたら、開け口を縫って閉じる。

④両端の布の長さを調整し、両方のたんこぶをきつく結び、完成！
※長さはアレンジ自在。型紙と発砲スチロール玉やウッドビーズを小さくすると、太さもアレンジ自在です。



手が動きだす ⑫

おばあちゃんのかばん

わたしが幼稚園のとき、おばあちゃんがピアノのお稽古バッグを作ってくれました。おばあちゃんは編み物名人。フェルトと毛糸でできています。高校生になっても、この鞆を大事にしていました。ある日、飼っていたハムスターが鞆に入りこみ、かじって大きな穴を開け出てきました。がっかり。またある日のこと、学校から帰ってくると、母が穴を繕ってくれていました。鞆についているカーネーションの花を真似て編んで、左下のところでした。ステキな修理です。

かとう ゆめこ：絵描き



手が動きだす ⑬

エイジング加工で再生

我が家の洗面所の鏡は、この家（築43年）に引っ越してきたときに、ボツンと置き去りにされていたものです。123×43cmの大きな縁なし鏡で、割れてもいないので、近所の木工所をお願いして枠を付けてもらいました。素木のままだと家の雰囲気になわないので、釘でわざと傷をつけ、経年変化や虫食いにあったようにエイジング加工しました。家の中には同じように手を加えた建具や家具がいくつもあります。古い家なので、少しの傷や汚れはかえって気になりませんが、それでも目立ってきたら、補修をしたり、塗り直ししたりを繰り返して「つくろって」暮らしています。鏡を見るたびに引っ越ししてきた当時を思い出します。古い家具や空き箱は工夫次第で変身させることができます。捨ててしまえばそれまでですが、想い出や、思い入れのあるものとして残すことが可能ですし、楽しみでもあります。そして、ちょっと自慢かもしれません。

中野 千栄子：ステンシル作家



手が動きだす ⑭

靴の健康管理

現代生活で欠かすことの出来ない靴。足は歩くこと、体重を支えること他に血液を体に循環させる役目もしています。心臓だけでは十分でない血液の循環を足の筋肉と足裏はポンプで行っています。足の機能が低下すると体中に様々な障害を生みます。靴はその足を保護する大事な役割をしています。さまざまな素材の靴が出ていますが、適度な通気性と柔軟性を持った天然素材の靴が足の健康に欠かすことの出来ない理由です。靴の手入れは健康管理でもあると思います。

庵 豊：クリエイティブ・プロデューサー

手が動きだす アンケートより

お気に入りのものが汚れたり、壊れたり、使いにくくなったりしたとき、みなさんはどうしていらっしゃいますか？
そんな問いかけに、ものへの愛着に満ちた多くの回答が寄せられました。

「繕うについてのアンケート」 2012 年12月実施 1496 名参加

付け替えながら受け継ぐ

私自身が「つくろった」わけではなくてお恥ずかしいのですが。私が幼稚園生ぐらいの頃、刺繍が趣味だった祖母がいつも刺繍入りの布バッグ（レッスンバッグ）やブリュックを作ってくれました。小学校高学年ぐらいまでランドセルのサブバッグとして使い、その後は年下のいとこ姉妹が使いました。（たしかこの時点で、叔母が刺繍部分だけ取り外して別の布バッグに縫い付けていました）さらに月日がたって、いとこ姉妹も大きくなり、叔母が今度は私の未来の子供に…と刺繍部分をくれました。その時、まだ私は独身だったのですが祖母が「とりあえず作とくね」とまた新しい布バッグに縫い付けてくれました。私も昨年結婚し、まだ子供はいませんが新しい家庭で、その刺繍入りの布バッグは30年前と変わらぬ美しさで活躍しています♪

（女性・30代後半）



妻に教わって繕った靴下

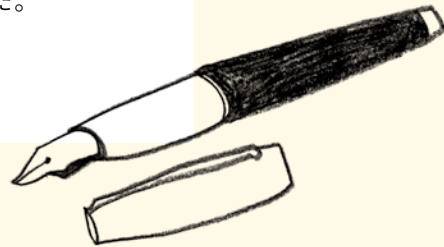
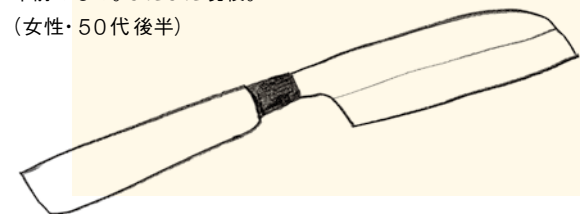
入院中の妻のお気に入りの靴下が穴が開き捨てようかと。妻はそのまま履くと言うので繕った。繕い方を教えてもらいながら結構きれいに出来た。妻も大変喜んでた。

（男性・60歳以上）

刃を替え、柄を替え

出刃包丁の柄を替え、刃を研いでもらって新品同様。今回で2回目の柄の交換。結婚した30年前のもの。まだまだ現役。

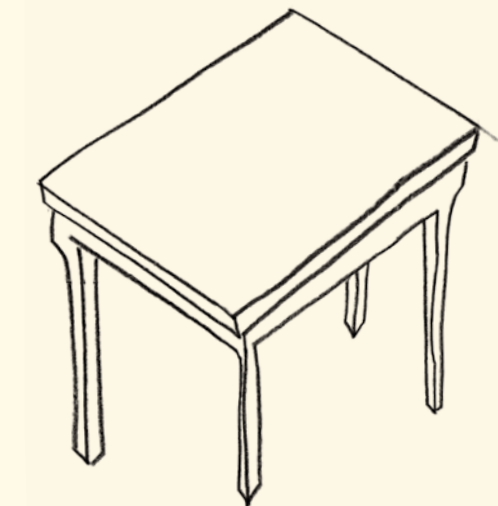
（女性・50代後半）



やっと探し当てた修理店

1年ぶりに修理され、戻った万年筆。40年前初めての海外旅行で購入した、シェーファーの金張りの万年筆。その姿も書き味も素晴らしかったが、いつの頃からベークライト部分が溶けてそのましましいこんでいた。シェーファーはもとより、日本中あたってみたが1軒だけ、1年かけて修理してくれた店が東京にあった。先月受け取りに行ったが、何より店の方の考えに共感できて、心まで修理されました。今日、そのとき一緒に旅行した友人にその万年筆で手紙を書きました。

（女性・60歳以上）



思い出の家を生かして

主人が家具職人なのですが、たまにお客様のご要望で、家を建て替える時に柱や欄間などを利用してテーブルをお作りしたりしています。お客様にとっては、育った家を壊す寂さと新しい物がうまれる喜びを同時に感じられる、大事な「つくろい」なのだと思います。主人はあたたかな気持ちと同時に、モノ作りに対する緊張感を感じずにはられないようですが…

（女性・30代後半）

作ったところに依頼して

黒皮の鞆の裏地張り替え。黒い粉がモロモロとわき出てきて、捨てるしかないかなと思っていた。そのブランドに問い合せ、修繕を依頼したところ、数週間後、内張りはびかびか、外側も磨かれ、きれいに包装されて戻ってきた。それなりに費用はかかったような気もするが、値段はまったく覚えていない。とにかく嬉しかったから、18年たった今も、お気に入り。

（女性・30代後半）



シーズンごとに手入れする

革製の靴は長く履くつもりで買ったものばかりなので、ワンシーズンごとに踵を打ち直します。場合によっては裏張りも。年々味が出てきて愛着が湧きます。

（女性・20代後半）



修繕しながら30年

高校一年生の時に買った折りたたみ傘を修繕しながら今でも時々使っている。15歳で買って現在45歳なので30年使っていることになる。取っ手や骨は修繕部品があるので直せるが、布地の部分はさすがに無理だと思う。今まで一度も破れていないことが長持ちの理由だと思っている。防水スプレーはこまめに振っている。

（男性・40代後半）



繕うについてのアンケートの結果はこちら>>
www.muji.net/lab/living/tsukurou-report.html

見慣れたカーテンの安心感

通勤族なので、引越して大方の片付けが終わったら取りかかるのがカーテンのサイズ調整。まあよくもこんなに、と思うほど、窓って千差万別。高さ、幅、カーテンレールの取り付け位置、直しがいらなかったことはないです。決して高級品ではないけれど気に入った柄のものをできるだけ使い続けたいので面倒ではあるけれど頑張ります。まだまだ慣れない街でも、家に帰れば見慣れたカーテンがかかっていると何となくほっとするのです。

（女性・50代前半）



ボロボロは「大好き」の証し

子供が保育園から絵本をもらってきた。ページのところどころに破れ目があり、背表紙と本体も切り離されてボロボロだったが、それだけみんなに読み込まれていたということ。長男も大好きな絵本だったので、破れ目は紙と糊で補強し、背表紙と本の本体の間も紙やテープでつなぎ、もとの絵本の形に戻した。子供は小学4年生になったが、今も我が家の本棚にあり、ときどき手に取って読んでいる。

（女性・40代後半）

金継ぎから学んだこと

長年捨てられずにいた欠けた器（お亡くなりになられた作家のもの）を直したくて金継ぎを習ったときに、漆にまつわる話をたくさん聞かせていただき、その素晴らしさに感動し、二重の喜びがあった。「漆は血の一滴」無駄にはできないと大切に片付けておられた先生の姿も素晴しかった。漆は木を育てて採取するまで70年、そして1本から一度きりしか採れないため。

（女性・40代前半）

無印良品と繕い 永く大切に使うため、無印良品はこんなことに取り組んでいます。

1 古い団地を今の暮らしに MUJI × UR団地 リノベーションプロジェクト



1



2



3



4



5



6

壊しすぎない。つくりすぎない。

無印良品は2012年春より、URと一緒に団地リノベーションに取り組んできました。対象は大阪の3つの団地の5つの間取り。ここから、今後空き部屋をリノベーションしていくプロジェクトが進んでいます。団地は、戦後の日本の暮らしの原風景をつくってきたもののひとつです。建設当時は若い人たちの憧れ像でした。しかしその後半世紀がたち、かつての日本人が理想とした暮らしと現代の暮らしには大きな違いが生まれました。最も大きな違いは家族の世帯人数。当時の平均的な家族は子供2人というものでしたが、現在は世帯人数が2人を下回っています。特に水まわりの設備など、今の時代には合わない部分もあります。なにしろ、当時は冷蔵庫も洗濯機もなかった時代です。そんな古い団地を、もう一度現代の暮らしに合わせてつくり直していこうと考えました。団地には課題もありますが、良いところもたくさんあります。敷地が広く採光や通風に恵まれ、緑も豊かです。クーラーがなかった時代の風通しのいい間取り

は今も快適な住環境を実現させてくれます。敷地内には公園や集会所もあり子育てにも便利です。駅からも比較的近く、スーパーや生活に必要な施設も充実しています。

こうした団地の良さを再発見しながら、その上に現代の暮らし像を実現させていくのがこのプロジェクトです。私たちが考えたコンセプトは「壊しすぎない。つくりすぎない」こと。リノベーションというすべてを壊して新たにつくろうとしがちですが、それではコスト高になり、新築の方が効果的になってしまいます。今あるものをどう活用するのか。その鍵が、壊しすぎないということでした。写真のように壁を壊しながらも鴨居や敷居は残しています。壁を取り払い、大きな空間をつくることで、つくり手が後から足せるように考えたのです。鴨居を残したのは、その後の暮らしの可変性への手がかりになってほしいから。リノベーションという暮らし方の提案に、賃貸で住むという可能性を広げてみました。

www.muji.net/ie/lifestyle/project_osakadanchi

2 急須のフタだけでも、お求めいただけます。



本体は大丈夫なのに、急須のフタだけが欠けてしまった。お弁当箱のパッキンだけがゆるんでしまった…こんなとき、みなさんはどうなさっていますか？まだ使えるのにもったいないと思いつつも、まるごと買い替える方がほとんどではないでしょうか。そうしたムダを省き、お手持ちのものを少しでも長く愛用していただくために、無印良品では23,000以上のパーツを取り揃えています。ただ、これらのパーツは他の商品と一緒に店頭で並んでいるわけではありません。また、そのすべてをお近くの店舗で取り扱っているわけではなく、お取り寄せになってしまうものも多数あります。そんなこともあって、今回実施した「繕い」のアンケートでは、無印良品でパーツを取り揃えていることをご存じない方が75%もいらっしゃいました。これからは、こうした情報をお伝えしながら、利便性の向上に努めてまいります。

□店舗でご購入いただけます。

パーツ購入をご希望の場合は、お持ちの製品の商品名・品番・型番・購入時期・購入先などをご確認のうえ、お近くの店舗またはお客様室にお問い合わせください。

□ネットストアでのお取り扱いに関して。

2012年10月より、別売りパーツがある商品については、商品詳細ページでPマークを付けてご案内しています。今秋にはネットショップでもパーツをお求めいただけるよう、現在、準備を進めています。



拡大